



あの日のあの川 リレー日記 ～第 80 話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第 80 話主人公 遠藤拓馬

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：福島県いわき市新川)

「変わりゆく川と変わりゆく私」

いつのこと？：小学生～高校生を経て現在へ

どの川？：いわき市夏井川

こんにちは。伊藤君からバトンをもらいました、白川研究室所属の遠藤です。私にとって川は、かつては恐れの対象でもあった水の流れている場所であり、一方で生物との触れ合いが心に安らぎを与えてくれる場所でもありました。

小学校の頃から水に入って泳ぐとなぜか鼻から水を吸ってしまい、プールの授業等は毎回生きて帰って来られるかを気にかけていました。身長伸びが止まるころにはだいぶましになりましたが、それでもやはり水は遠くから見分には良いけれども、そこに真に近づこうとすると一抹の恐怖が頭の片隅から沸き上がり、その感覚に対してひたすら見て見ぬふりをしていました。

一方で、地元の夏井川では毎年秋にサケが遡上、冬には白鳥が飛来しました。また夏井川の支流で実家に最も近い新川にはカモ、コイ、アオサギ等が生息していました。白鳥を見に行きパンの耳を与えたり、カモやコイを見に行きパンの

欠片を与えてみたり、彼等の生活には目もくれず土手を通って高校までの道のりを自転車で行き来したり、確かに私の生活にも身近な川と定期的に、そして日常的にかかわるような側面があったのです。

高校生以降は災害としての川も認識するようになりました。高校 2 年生には令和元年東日本台風(2019)が夏井川やその支流の好間川を決壊させ、大学 2 年生には台風 13 号(2023)によって地元新川が越水し、見慣れた町が瓦礫と泥の山となりました。いずれの災害でも復旧活動に向かいましたが、水の破壊力に言葉を失い自然の恐ろしさを改めて痛感したことを、今でも鮮明に覚えています。2 回目の災害から 4 か月後に私は白川研究室『川と人』ゼミに入ることになりましたが、その決断をしたこととこれらの災害の経験は無関係ではないかもしれません。

冒頭の写真は大学 1 年生の冬に帰省した際に撮影した夏井川です。3 年前に決壊した堤防が補修され、大規模な河川改修工事が行われている最中でした。木の生い茂っていた河原は面影を消し、ハードに固められた護岸ブロックと盛り土がどこまでも続いていました。小学生の時に白鳥のエサやりをしていたのは丁度この辺りです。考えました。「ここに白鳥やサケは戻ってくるのだろうか。」

遠くに望む水石山より吹き付けてくる寒風は相変わらずの暴れっぷりでしたが、記憶にあるよりも冷たく、乾いていました。

(次は亀谷礁冴さんにバトンを託します)